

-----  
『「新ライン新聞」に見る革命的ジャーナリズムのあり方』①  
-----

雑誌「前衛」に 2012.11 から 2013.1 に 3 回に亘って『「新ライン新聞」に見る革命的ジャーナリズムのあり方』と題して河邑重光氏が論文掲載。マルクスやエンゲルスが 19 世紀の革命の世紀に初めて歴史の舞台に登場。その唯物史観による確かな歴史眼のもと、その活動を詳細に「新ライン新聞」等に基づき紹介している。

ここでは、分割してその論考を追ひ、併せて 19 世紀、ヨーロッパにおける資本主義勃興期の有様を追認したいと思います。資本主義的世界を知る事は、将来の地球共同体を知る前提となるからです。以下は、分割してツイッターにも発信する予定です。

なお、() の番号は原書の目次番号です。

-----  
①雑誌「前衛」に 3 回に亘る「新ライン新聞」に見る革命的ジャーナリズムのあり方、河邑重光氏の論文紹介。前書き：志位委員長「世界でも異常に発達した巨大メディアが全体として『権力の監視役』という本来の仕事を放棄して権力と一体化し、『悪政推進の尻叩き役』へと墮落」している。と。  
-----

②河邑氏はマルクス・エンゲルスが（以下 ME）「新ライン新聞」に書いて『ME』全集に収録されている約 400 篇の論説等を読み通すことで、革命的ジャーナリズム＝人民的ジャーナリズムのあり方役割を考えてみたい。我々はこれを追読する事により併せて欧州における資本主義の展開過程を確認したい。

-----  
③(1)「新ライン新聞」は 1848 年にドイツで革命が起きた際に ME がドイツ・ライン地方の中心地ケルンで発効した日刊新聞。1848.6.1 創刊、プロイセン政府の弾圧により 1849.5.19 の最終号まで約 1 年間発行。最高時は約 6 千部、ブルジョア的な「ケルン新聞」でさえ 9 千部を越えてはいなかった。  
-----

④(2) 1848 年の欧州は農作物の凶作を契機に各国で革命が起きる。2.24 仏国王追放共和制に。3.13 オーストリアの首都ウィーンで武装蜂起。3.18 プロイセンの首都ベルリンでも武装蜂起。革命はさらにイタリアなど欧州各地に広がった。  
-----

⑤「ドイツにおける革命と反革命」でエンゲルス（E）は、革命後の政治状況を分析。「それまで旧政府に反対する点で一致結束していた諸政党と社会階級とが勝利を得たあとで仲間割れをおこした。

-----  
⑥勝利を独占した自由主義的ブルジョア階級は、昨日までの同盟者に背いてより進歩的な階級や政党を全て敵視し打破られた封建的官僚的勢力と同盟を結んだ」と。憲法制定を主任務とする国民議会は選挙によって議員が選ばれたが、その構成は行政官學者らが多数を占め革命の任務遂行には全く無力でした。  
-----

⑦パリでも 2 月革命により生まれた国民議会は、M によれば「17 才～ 25 才迄のパリ労働者を軍隊に強制徴収するか又は街頭に放り出す。パリ以外の労働者は地方に放逐。成

人パリ市民は共和主義者を止める条件で軍隊組織をもった作業場に入れて臨時的に恩恵のパンを保障する。」(M・6月革命)

⑧ウィーン：8月下旬、失業者に与えていた政府扶助打ち切りに対して労働者デモ。中間階級からなる国民軍がこれに襲いかかり武器を持たない多数の労働者を虐殺。オーストリア皇帝はハガリー国会の解散宣言。対する人民蜂起には圧倒的軍事力でウィーン制圧。プロイセンでも蜂起は7月半ばには鎮圧、ドイツ革命は終了。

『「新ライン新聞」に見る革命的ジャーナリズムのあり方』②

⑨(3・4)「新ライン新聞」の対応①「ドイツ人民は国内殆ど全ての都市のバリケードでその主権を闘い取った」「国民議会は第1にこの主権を公然と宣言すべきであった。第2に人民主権に基づきドイツ憲法を作成し、人民主権の原理に反する全てのものを除去すべきであった」( )の番号は目次番号。

⑩「その全期間を通じて国民議会はあらゆる反動の企てを打ち破りその革命的基盤を維持し、革命の成果である人民主権をあらゆる侵害から守るために必要な方策をとるべきであった。ところがドイツ国民議会は、既に1ダース程の会議を開きながら以上の全ての事について何もしなかった」(上・了)

⑪(5)E：「1848革命が起きると全ての被抑圧民族が独立国民として生活し、自分の問題を自分で解決する権利を要求した。ポーランド人が1772年以前の旧ポーランド共和国の国境の範囲内で彼等の祖国を再興する事を直ちに要求したのは全く当然であった。」(ドイツにおける革命と反革命)

⑫「ただ1つの可能な解決はロシアとの戦争にあった。まず共通の敵に対して安全な国境を打ち立てるという問題について比べれば革命を起こした様々な民俗の間の境界を決定する問題は第二義的なものとなったであろう」(革命と反革命)(p216)・・・しかし

⑬「支配者となった中間階級の党は、ロシアとの民族戦争が起これば、もっと活動的で精力的な人々に国政が委ねられ、自分達は没落するだろうと、はっきり予見していた。そこで彼等は、ポーランド革命の本拠であるプロイセン領ポーランドを、将来のドイツ帝国の不可欠の構成部分と宣言した」

⑭「新ライン新聞」対応②ポーランドの分割に反対、独立支持。「ポーランドの新しい分割が行われたのはプロイセン国家の国庫を満たすためであって他に理由はない。」  
「ヨーロッパの反動勢力が1815年以来第1の支柱と頼んでいるものは何か。ロシア=プロイセン=オーストリアの神聖同盟である。

⑮この神聖同盟を1つに纏めているものは、ポーランドの分割である。それは、ポーランドの封建大貴族と分割者である3国との同盟によって実現された。それは、大貴族が革命を免れる為に用いた最後の手段であった」(p218)

-----  
①⑥「ポーランド独立の為の闘争は同時に家父長制的=封建的絶対主義に対する農業民主主義ー東ヨーロッパで唯一可能な民主主義ーの闘争でもある。故に我々がポーランドの抑圧に手を貸している間は、その一部をドイツに縛り付けている間は我々は依然としてロシアとその政策に縛り付けられたままであり、  
-----

①⑦我々自身のところの家父長制的=封建的絶対主義を根本的に打ち破ることはできない。民主的ポーランドの建設は民主的ドイツの建設の為の第一条件である。」実際にロシアは、ポーランド独立を阻む障害であっただけではなく 1848 年の一連の革命以後、直接の脅威となっていた。(p219)  
-----

①⑧ E:「フランクフルト議会にとって、事態を訂正する道はまだ 1 つだけ可能であった。即ちポーランド全体をドイツ連邦から除外し、そして復活されたポーランドとの対等の立場で交渉できるようになるまでは国境問題は未決であると宣言すべきであった。」  
-----

①⑨しかし議会はこの道をとらなかった。「起立・着席だけで 500 平方マイルの土地をドイツに獲得し、80 万人のネッツ同胞、ドイツ系ポーランド人、ユダヤ人及びポーランド人を併合できるのだ。彼等はこの誘惑に負けた。彼等はポーランドの分割を確認した。」(中 p219) (続く)  
-----

『「新ライン新聞」に見る革命的ジャーナリズムのあり方』③  
-----

②⑩(6)対応③パリの 6 月革命 E:「最初の勝利で利益を得た社会階級がすぐさま敗者と同盟を結んだ為、1848.4 の初めには革命の本流が堰き止められていた。フランスでは小商工業者の階級とブルジョアジーの共和主義的分派とがプロレタリアに対抗して君主主義的ブルジョアジーと結んでいた。(p219)  
-----

②⑪もしここで蜂起が勝利すれば全大陸は革命の洪水で覆われるであろうし、もし鎮圧されれば少なくとも一時的に反革命の支配が復活するであろう。」結果、「パリのプロレタリアは打ち破られ全ヨーロッパは新旧の保守派と反革命派があつかましくも台頭してきた。」(p220)  
-----

②⑫「蜂起は純然たる労働者の蜂起である。3 万ないし 4 万の労働者がまる 3 日間、8 万以上の兵隊と 10 万の国民軍に対抗し、霰弾や榴弾や焼夷弾に抗し闘った。彼等は圧伏され大部分は虐殺された。彼等の死者に対しては 7 月や 2 月のような敬意は示されないであろう。  
-----

②⑬しかし、歴史は、彼等プロレタリアートの最初の決定的野戦の犠牲者達に、全く異なった座席を与えるであろう」「パリの労働者は優勢の敵に圧伏されたが、彼等はその敵に屈服したのではない。残忍な暴力の瞬間的勝利は 2 月革命のあらゆる欺瞞と空想を絶滅することによって、  
-----

②④古い共和主義的党派を全部解体させ、フランス国民を、所有者の国民と労働者の国民という2国民に分裂させることによって購い取られたのである」「平民は、飢えにさいなまれ、新聞からは侮辱され、医者達からは見捨てられ、彼等の妻子は悲惨の奈落に突き落とされる。

②⑤この平民、彼等の為に、その陰しく暗い額に月桂冠を巻き付けてやる事、これこそは民主主義新聞の特権でありその権利である」(M)(中 p220) 以下は6月革命後のドイツにおける「決戦」(中 p224) から抜粋。

②⑥(7)M「危機と反革命」(新ライン新聞)「ベルリンに起こった衝突は、初めて憲法制定議会としての立場を取る議会と王権との衝突である。ところで主権を持つ議会は何人もこれを解散できず、何人の命令にも服従しない。だから議会を解散するのはクーデターだということになろう。」(p227)

②⑦「すべて革命の後に続く臨時的な国家秩序は、執権を、しかも精力的な執権を必要とする。我々が初めからカンプハウゼンを非難してきたのは、彼が執権者として行動せず古い諸制度の遺物をすぐに粉碎し、取り除くことをしなかったからである。」(中 p227) これがマルクスの「執権」論です。

・・・革命後の2重権力状態の時に、革命派の精力的な執権こそが革命を成就させるものであることをMは強調しているのです。

②⑧「新ライン新聞」9.23 付け「反革命の内閣」「プロイセン皇太子の内閣が成立。反革命は敢えて最後の決定的な一撃を加えようとしている。ベルリンの議会を追い散らすだろう」9.26 ケルンに戒厳令がしかれ軍法会議設置。新ライン新聞は発行禁止に。

②⑨(8)ウィーンの十月蜂起。中間階級の国民軍が多数の労働者を虐殺。ブルジョアジーの裏切り。ドイツ人民がウィーン人に与えることのできる「唯一の援助とは自国の反革命を打ち負かすことである」と新ライン新聞復刊第一号。11.1 ウィーン陥落とウィーン革命の敗北。(以上、中・了)(続く)

『「新ライン新聞」に見る革命的ジャーナリズムのあり方』④

③⑩(9)プロイセン憲法制定議会の解散。E:「革命にあつては戦争におけると同様に、決定的瞬間には賞賛の有無に拘わらず、全てを賭することが何よりも必要である」人民主権を代表する国民議会とそれを否定して王権を押し通そうとする国王との2つの権力が真っ向から対立している。(M)(下 p205)

③⑪新ライン新聞：王権を屈服させる手段として国民議会が議決した納税拒否の運動を提起。プロイセン国王はこれに対し国民議会を解散「プロイセン憲法」施行。M「我々の立っている基盤は法の基盤ではなく革命的な基盤である。今では政府側も法の基盤という偽善を捨て革命的な基盤の上に立った」

③② 1648 年と 1789 年の革命は、決してイギリスの革命、フランスの革命ではなかった。それらはヨーロッパ的な規模の革命であった。それらは新しいヨーロッパ社会の為の政治秩序を宣言した。プロイセンの 3 月革命はヨーロッパ革命どころか遅れた 1 国にヨーロッパ革命が及ぼしたいじけた余波にすぎなかった。(p209)

-----

③③ (10) 反革命の攻勢と憲法戦役。「賃労働と資本」を連載する「新ライン新聞」。これまで何より先ず必要だったのは「日々の歴史の中に階級闘争のあと」を辿ることであり、「現存の歴史的素材や日々新たに作り出される歴史的素材」に基づいて革命の階級的意味を「経験的に証明」することだった。

-----

③④ 「全て革命的反乱というものは…革命的労働者階級が勝利するまでは失敗する他ない」事が証明された後では「今こそブルジョアジーの存立と彼等の階級支配並びに労働者の奴隷状態の基礎をなしている経済的関係そのものを詳しく検討すべきときである」と。(下 p213)

・・・ 17,18 世紀の英仏における革命を近世の封建的社会から近代の資本主義的ブルジョア社会へのヨーロッパ的規模の革命と捉え、プロイセン 3 月革命をその余波と見なした歴史眼に留意したい。それは又、資本主義的ブルジョア社会の基本構造をその根底、即ち「賃労働と資本」において捉え、いよいよその資本主義的経済的諸関係の科学的究明に向かう決意表明なのです。

-----

③⑤ (11) ハンガリー戦争。1848.9、オーストリア帝国の支配下にあったハンガリーが独立を要求して行動。50 紙もの新聞から情報収集。科学的な軍事分析。戦力、軍事行動分析、地形（気候）との関係、更にはその土地の住民との矛盾、特に民族的矛盾に目を向け、大局的な判断を示した。

-----

③⑥ (12) 補遺 ME の新聞論。河邑氏の教訓。第一に、唯物史観により日々の情勢と切り結び、大局的な社会の発展方向、闘いの展望を示す、文字通り闘いの指針でありツールであった。それは「執権」論という新しい理論的発展をももたらした。

-----

③⑦ 第二に、如何に不利な条件のもとにあろうと、労働者階級擁護の立場、被抑圧民族擁護の立場を貫くと同時に、人民の生活の場で日々現れる権力の抑圧と闘い、人民の生活と権利を守ること。「新ライン新聞」の論説を巡る裁判でのマルクスの法定弁論が重要な指摘をしている。(③⑧参照)

-----

③⑧ 1849.2.7 ケルン陪審裁判所におけるマルクスの弁論「被抑圧者の最も身近な環境に於いてこの被抑圧者の為に起つことは、何といたしましても新聞の義務であります。」「一般的状态や再興の権力と闘うだけでは十分とは言えません。新聞は、この憲兵、この検事、この郡長と争う覚悟をしなければなりません。」

-----

③⑨ 3 月革命は何が原因で失敗したのか？それは、3 月革命は、最高の政治的頂点を改革しただけであって、この頂点を支えている一切の基礎、即ち、旧官僚、旧軍隊、旧検事局、絶対主義に対する奉仕の中に生まれ、教育され、そして白髪となった旧裁判官には、手

を触れずにおいたからです。

④⑩今や新聞の第一の義務は、現存の政治秩序の一切の基礎を掘り崩すことであります。」  
河邑氏：これは、今日でも革命的ジャーナリズム、とりわけ革命的日刊新聞が受け継ぐべき原則的立場だといえるでしょう。と。

④⑪第3に、言論、出版の自由を守る事。M「新聞は、その使命からすれば、公共の番人であり、権力者に対する倦むことのない告発人であり、猜疑深く自己の自由を監視する国民精神の偏在的な目であり、偏在的な口であります。」

④⑫第4に、MEが、国民議会での論議を、政府側の発言を含めて非常に重視したこと。これは国民議会を「最高立法権力」という位置づけによることは勿論、同時に、議会での論議が時々の政治的潮流を繁栄するものであり、人民に対して大きな影響力を持つことを重視したものです。

④⑬第5に、他の諸新聞の報道、論評を重視した事。その為に広く新聞を収集し、ハンガリー戦争関係だけでも50紙も参照していた。それは、何よりも正確な情報を集め、事実に基づいて正しい判断をする為であり、新聞論調の人民への影響を把握し、これに的確に対処するためでした。

④⑭以上、河邑重光氏の『「新ライン新聞」にみる革命的ジャーナリズムのあり方』を追跡してきた。我々は、新聞のあり方と併せて19世紀資本主義勃興期のヨーロッパ情勢について、MEの確かな視点とその活動を確認した。20世紀初頭の帝国主義時代にはレーニンの活動が研究されねばならない。

④⑮そして、第二次世界大戦から約70年経た21世紀の今日、マルクスの時代にはヨーロッパ的規模の出来事が、今日では世界的・地球規模にまで拡大されている。そして、地球規模で展開する資本主義的生産様式は、資本の論理により地球規模の生態系を破壊し、環境を汚染し、未だに人民間の紛争を解決できていない。

④⑯マルクスやエンゲルスの産業資本・自由主義の時代から、レーニン等の金融独占資本・帝国主義の時代（第二次世界大戦迄）を経て、今や地球規模で総資本支配階級が人民を抑圧搾取している。しかし、資本の桎梏の重圧は我々を結束させ、新しい地球共同体に向けて連帯と団結力を強化している。(1.11K.M)

以上。雑誌「前衛」『「新ライン新聞」に見る革命的ジャーナリズムのあり方』河邑重光氏の論文を紹介。了。(2013.1.12)

※汲めどもつきない歴史的教訓に満ちた論考であると考え、ここに掲載する次第です。